



Daibai

SHOBOJI.NET



SHOBOJI BULLETIN "DAIBAI"
ISSUE NO.20
PUBLISHED ON JANUARY,2026

PUBLISHED BY:
大梅拈華山 圓通 正法寺



TAKE FREE



本山御征忌にて御親香 徹祖忌の御代理をお勤めになる山主老師

利行は一法なり 普く自他を利するなり



新年の御挨拶
寿 春

山主 盛田 正孝

年頭に際し貴寺並びに御尊重、更には御山内皆々様の福寿無量を御祈念申し上げます。平素、正法寺の為に御力添えを賜り誠に有り難く心より御礼申し上げます。

私も八十歳を過ぎ、自らの人生を振り返り、記憶に基づいて願ひする事が多くなりました。その中のひとつに、時恰も学生運動の最中でした。「自由とは」との演題に惹かれて行つた時のことです。経済学者の方が自由について語るといふ事でした。「君は自由である。何でも好きなように何をやつてもよい」と言われると、大概の人は自利即ち自分の得になる様に行動するものだ。しかし人間、自分の利益の為に思つてやつてみても、必ずしもそうはならない。そこで自分の得になると思つてやつた事なのに、自利にはならない事を一つひとつ除外していく。するとたったひとつ

ただけ本當に自利になる行為が残ると言う。それは何か。「利他行」であると。自由であり、何をやつても良いと言われても断じてそうではない。人間の為すべき事は、ひとつしか無い。他は皆、不自由をもたらすものである。そして最後に道元禪師の「利行は一法なり、普く自他を利するなり」と。これ以外に眞の自由は無いと。それ以来「人間の生き方を決めるものは利他行である」と合点した次第です。

利他行をするには、常に欣求菩提が問われている事を忘れずに、今年一年、山内一同、心をひとつにして修行し、これをもって皆様方の御支援に対しての感謝報恩とさせて頂きます。

何卒本年も宜しく御指導御法愛の程、お願い申し上げます、御挨拶とさせていただきます。



年頭の御挨拶

堂監

高橋哲秋

仏紀三三九二年、令和八年の改歳にあたり、皆様におかれましては、はき新年をお迎えのことと拝察いたし慶賀に存じ上げます。

山主老師におかれましては、以前から各地への慶弔会などの法要や講演などの拜請は多くありました。加えて四年前に大本山總持寺副貫首に御就任されて以来、益々お忙しくなり、

昨年もお静報告のとおり御多忙な一年でしたが、恙なくお役目を果たされております。山内でも晴天・朝課・展鉢飯台・朝参などの如常の行持をお勤めになり、禅僧育成に心を傾けておられます。

正法寺では平成二十九年二月十五日に再開して以来、毎年夏冬の制中を勤めてきましたが、昨年夏は安居者不足のために結制を置くことができませんでした。少子化問題は、過疎化にも拍車をかけ、小中学校の統合も加速度的に進んでいます。「こどもは国の宝」と言いますが、「徒弟は宗門の宝」です。寺院の後継者不足により兼務が増加しており、徒弟養成は喫緊の問題です。

正法寺は、貞和四年（一三四八）開創の二年後に崇光天皇より「奥羽二州の僧録を為し、扶桑曹洞第三之本寺也」の勅旨を賜り、更に康安二年（一三六二）に峨山禪師より「正法寺末代可爲兩國曹洞之本寺之状依如件」の

置文を頂戴しています。以来寛永十四年（一六三七）迄の凡そ二百八十年間、曹洞宗第三の本山・出世道場の役割を果たしてきました。僧侶養成の修行道場としての役割は現在に至るまで、綿々と行われています。

江戸幕府による慶長十七年（一六一二）の「曹洞宗寺院法度」、元和元年（一六一五）の「諸宗諸本山法度」などにより正法寺は本山格を失い、加えて寛永二十一年（一六四四）に十八世様遷化後の三年間、十九世様遷化後の十三年間、二十世様遷化後の八年間は監寺による住持代行という時代がありました。一方、寛永二十一年（一六四四）に伊達忠宗公より三貫文の知行を受け、更に元禄七年（一六九四）に伊達綱村公から四貫五百文を頂戴し、伽藍造営など仙台藩より篤い庇護を得ました。

明治以降の正法寺は、経済的に厳しい状況が続いておりましたが、現在はいは末寺御寺院七十三ヶ寺はじめ、正法寺発展興隆奉賛会会員並びに御協賛各位、檀信徒の皆様、関係各位のお力により支えられております。

未だ曾て宗門に第四・第五の本山はありません。歴史上のことであつても「第三の本山であつた」といえるのは「正法寺」だけです。

正法寺の歴史の重さとは大伽藍の荘厳さに包まれ、おかげさまで本制中を勤めております。山主老師御慈愛御叱咤の元、今後も油断なく役寮大衆ともに日々の行持に精進していく所存でございます。

本年も何卒よろしく御法愛御教導御支援賜りますようお願い申し上げます。



・山主動静報告・

（令和七年四月一日～十二月三十一日）

四月

十一～十五日
大本山總持寺
授戒会

十月

十二～十五日
大本山總持寺
御征忌会

五月

二十六・二十七日
長野県安楽寺
晋山・結制 西堂・白檀師
八・九日
宮城県圓福寺
本葬儀 秉炬佛事師

十一月

二十五日
岩手県慈眼寺（直末）
開山忌・先住忌
焼香師

六月

二十五・二十六日
東京都蒙徳寺
晋山・結制 西堂・白檀師
白檀師 開山歴住諷經焼香師
十一日
山形県向川寺
晋山式

十二月

三十日
福島県龍臺寺
本葬儀
秉炬佛事師
三十一～十一月一日
愛知県龍祐寺
晋山・結制 西堂・白檀師

八月

二十日
福岡県宗勝寺
本葬儀 秉炬佛事師
四日
東北管区教化センター
禅をきく会 法話

十一月

十三日
山形県第一宗務所
梅花奉詠大会 法話
十八日
福岡県安國寺
開山忌・先住忌 焼香師

九月

二十七日
山形県東林寺（直末）
本葬儀 秉炬佛事師
三十日
總和会東北大会
法話

十二月

二十二日
山形県善賢寺
先住忌 焼香師



平成二十九年の僧堂再開単以来、毎年夏冬の制中を結んでおりましたが、昨年夏は安居者がなかったためにかなわなかったことは、誠に残念でございました。
しかし本制中は特殊安居を含め七名の大家を迎えることができました。
制中行持として先ず、十月十九日に配役行茶・首座入寺式と土地堂念誦、二十日課罷に人事行札が行われ、以下の配役が告げられました。

令和七年冬結制

堂 長	盛田正孝
堂 監	高橋哲秋
後 堂	春日和光
単頭兼監事	松森弘隆
副 寺	藤村浩禪
副監事兼侍者	佐々木道雄
維 那	躑躅森大康
典 座	高橋哲行
侍 真	佐々木将斗
布教師	海野義範
請客侍者	宇津野弘道
維那補兼書記	伊藤裕磨
非常勤梅花流講師	齋藤弘頭
首 座	三浦颯太
辨 事	桐畑圭佑
堂行兼方行	永浜賢道
副堂兼後行	平賀義裕
鐘司兼単行	竹内良典

十一月二十四日、山主老師により「從

答録」第十七則「法眼毫釐」の提唱をい

たいただきました。道元禪師の『普勸坐禪

儀』の「毫釐も差有れば、天地懸に隔た

る」の教えと、更にその原典となる中

国三祖鑑智僧璨禪師の『信心銘』の「至

道無難、唯だ揀択を嫌う、但だ憎愛莫

ければ、洞然として明白なり。毫釐も

差有れば、天地懸に隔たる。現前を得

んと欲せば、順逆を存すること莫かれ

」を取り上げ、修行僧のありようは

開口闍梨(辨事)との問答

問 我等が生活に、信仰はなにゆえ

必要なりや。

答 教えがなければ禽獸に等し。

問 教えがなくても生きていく上

に、なんら支障はござらぬ。

答 犬も猫も食って生きている。自

己を究明し人生の価値を認識し

うるは、我等人間に与えられた

唯一の賜物なるぞ。

問 然らば信仰なき者、如何。

答 己が畠の草を取らずして、他の

畠の雑草を笑う。己の至らざる

を省みず、他人を誹謗する者を

無信仰者と名づく。

問 信仰生活とは怎麼生。

答 常に己の為を省みず、自未得度

先度他の生活をなす者、即ち信

仰生活という。

問 珍重

答 万歳

本則行茶と首座法戦式には、末寺御

寺院や正法寺関係御寺院のほか、

本師さま関係僧侶併せて約三十名の

御列席があり、正法寺ならではの儀

式の厳肅さと首座和尚の意気込みに

感動された様子でした。また、本師さ

まは自ら二十五日の朝課に御随喜さ

れ、僧堂の日常行持を味わってお

りました。

熊野大権現大祭祈禱会

去る十月十六日(火)、当山鎮守 熊野

大権現大祭祈禱会を修行し、春日和

光後堂が導師を務め、末山御寺院や

有縁諸師の御随喜を頂きました。参

列者は、回向中の読込みでは自分の

願いに耳をそばだて、読経中焼香で

は神妙な面持ちで導師からの理趣分

の功德を頂戴しておりました。

熊野大権現が当山に奉祀されている

因縁は、永正十年(一五一一)に七世

寿雲良椿様が記された『正法年譜住

山記』の中に

右、当山鎮守に熊野・白山を勧請した

てまつること。その由来久し。

開山和尚、未発心の時、十九歳にして

御郷里に在り、靈夢を感ず。熊野に参

詣し、一世所願、満足せん、と。しこう

して翌日、熊野に参詣し、本宮清浄殿

に通夜す。また告げたまわく「俗を捨て

て出家修行せば仏法純熟せん。あか

じめ仏法の靈瑞のために奇石一ヶを

取するにおよばず。

これ、依つて末代まで見孫の證拠に

して信心いたすものなり。

(後略)

と記されています。従つて正法寺に

は開山以来、熊野大権現を勧請し

「件の石」とともに法堂西側にある

御堂に祀られております。

当山で初めて熊野大権現大祭祈禱

会が行われたのは、昭和五十九年

(一九八四)九月、五十五世成田芳體

老師(大本山總持寺独住第二十二世

大環正應禪師)が晋住されてからの

ことです。成田老師は、正法寺発展

興隆のために、末山檀信徒を始め、

できるだけ多くの方々に関心を寄

せていただくことが大事だとして、

祈禱会には秘仏とされている御本

尊如意輪觀世音菩薩(県指定文化

財)を開帳し、今に続いております。

以来、家内安全・心願成就など多く

の方々の願いを込めて大般若六〇

〇軸の転読が営まれています。





令和七年六月九日入堂
宮城県 第一九三番
圓幢院 徒弟

永浜賢道



令和七年九月二十二日入堂
静岡県 第一〇六四番
竜泉寺 徒弟

桐畑圭佑



令和七年九月二十二日入堂
岩手県 第九九番
妙桃寺 徒弟

平賀義裕



令和七年九月二十二日入堂
岩手県 第二四八番
吉祥寺 徒弟

三浦颯太



令和七年十月七日入堂
茨城県 第一一二番
智心院 徒弟

竹内良典



令和七年十月七日入堂
岩手県 第九五番
正蔵寺 徒弟

渡邊泰光



令和七年十月七日入堂
北アメリカ
佛眼寺 徒弟

シヨーストロム浄一

山内大衆

「首座」の任にあたって

岩手県 第二四八番
吉祥寺 徒弟 三浦颯太

「首座」を「しゆそ」と読むことも知らない、そんな私が正法寺に上山したのが九月の事でございました。そこから一、二カ月程で今制中の任を頂いた訳でしたが、その際に私がまず決めた事が、まだ新到である事、また私が今年得度したばかりの在家出身である事を、この首座という任につけてくる責任の逃げ道にしない、さらには、周りの方々にもそこではないと言わせない。そういった行動をしていこうという事でした。

しかしながら、冒頭にも申し上げたとおり、私は修行の事、また仏教の事に関して、まだまだ無知の域を出ませんので、悩み迷いは日々、尽きることがありませんでした。

一番考えた事は、首座として、修行僧のリーダーとして、どのようにすれば皆で手を取り合い、同じ一本の道を歩むことができるのかといった事でした。誰か一人が別の道に行く事もなく、同じ道としても、走り去ってしまうような人が出てほしくないし、転んで起き上がれない人を置いていくたくない。

当初は答えを出すのが非常に難しく思えました。そんな時に思い出されたのが、山主老師が常々私達におっしゃる「修行は自分持ちである」という言葉でした。私が首座としてどんな修行がしたいのか、それを全て自分自身の責任の中で、なによりも純粹に取り組む。その姿でもって、大衆達も

それぞれがそれぞれの責任の中で、手を取り合う事ができるのではないかと、私なりの答えを出しました。

今制中が終わった後、私は大衆に対してこの期間に何を思ったか聞くつもりはございません。なぜなら大衆一同が同じ道を、時には走りだそうと思つた者、痛みが足が止まりそうになつた者もいたでしょうが、歩みを続けてきたからです。

また「御苦勞様」という言葉、この言葉も今制中を共にした私達には不要でしょう。なぜなら、蓮元禪師は「彼岸に到る」のではなく「すでに彼岸に到っている」のだと示された事を学んだからです。目的に達するための修行ではなく、修行すること自体が目的なのだ。私達が禅僧である以上、今制中が終わろうとも、また将来、安居が終わろうとも、坐禅をすることに終わりはないと教えを受けました。なので、ここで御苦勞様は言わない。そもそも修行の中に、その言葉はないと知ったからです。

最後になりますが、今制中を有意義に、そして何より無事に過ごさせていただいているのは、御老師方役寮さん方の御力添え、御心遣い、そしてそのほか、御支援、御指導賜つたたくさんの方々のおかげであると感じております。大衆一同を代表いたしまして、御礼申し上げますとともに、任首座の言葉とさせていただきます。

ありがとうございます。

宮城県 第一九三番
圓幢院徒弟 永浜賢道

私は、暖かな陽射しのもと正法寺に上山いたしました。

年齢的にも体も固く物覚えも良いとは言えず危惧しておりましたが、山主老師、役寮の皆様のお心配りもあり、無事お勤めをさせていただきました。安居中は、一人だったこともあり、ひたすら行をこなすことが精一杯でした。その分学ぶことが沢山あり、山主老師、後堂老師より「一つ一つを大切にしないさい」というお言葉をいただきました。「調身」「調息」「調心」という言葉がありますように一日一日を大切に心がけていく中で、自分と向き合うことができようになり、心も楽になつていきました。おそらく、何かに囚われていたのかもしれませんが、人は決して一人では生きていけないことは誰でもわかっています。誰もが人との繋がりの中で生きていくのです。正法寺専門僧堂の厳格の中、温かなご指導・ご配慮をいただきました山主老師をはじめ、役寮の皆様には大変感謝いたします。

正法寺でのこのご縁を大切に今後とも励んでまいります。

静岡県 第二〇六四番
龍泉寺徒弟 桐畑圭佑

わたしは令和七年九月二十二日に、この正法寺に入室させていただきました。この正法寺は「教えていただくのを待つではなく、自身から学びにいかねば勉強できない」と、この短い期間で感じた事でありました。人数が少ない為、様々な当役が当たりますが、ほぼゼロからの私たちが役寮さん方に細かく訊ねないと解らない部分が多々あります。その為、一度教えていただいた事は一度で記憶し身につけて行かなければならないと感じています。送行する時に成長したと思えるように、日々精進していきたくと思っております。よろしくお願ひ致します。

岩手県 第九五番
正蔵寺徒弟 渡邊泰光

十月二十日に特殊安居で上山して早や二か月。以前は永平寺系の僧堂に四か月程いましたので、最初は正法寺での進退にとまどうことがありました。しかし役寮さん方のご指導と同安居の仲間のおかげで、何とか進退を含め様々な公務を覚えることが出来ていきます。大学卒業直前に患った消化器病気のせいで、山内の皆さんに助けてもらってばかりの安居生活でありましたが、感謝の気持ちを忘れる事なく、一日々々を大切にすると共に、摂心や托鉢を頑張っています。

岩手県 第九九番
妙桃寺徒弟 平賀義裕

自分は今までお寺の仕事を手伝う位しかしてこなかったため、法具の名称や法要の流れや動きなど全くというほどわからなかったのですが、ここ正法寺に安居して役寮の方々と古参の先輩諸老師にしっかりと丁寧な教えていただきました。修行に出来る前よりも、まだまだほんの少しではありますが、わかるようになり、嬉しくもあり楽しく思えるようになりました。そして自分が正法寺に安居した修行僧である事がとても誇らしいです。正法寺に安居してよかったです。

茨城県 第二二二番
智心院徒弟 竹内良典

上山直前まで社会人として、寺院とは全く関係のない分野で働いていました。寺の徒弟でありながら進退作法に關して無知な上に三十代半ばという年齢。さらに持病の影響による障害があり、不安な気持ちで一杯でした。いざ正法寺に安居してみたら、そんな不安は払拭されました。役寮さん、同安居の方々に恵まれ支えられながら、摂心も乗り越えることができました。時には辛いこともあるかと思いますが、無事に安居生活を送って行きたいと思えます。

北アメリカ
佛眼寺徒弟 ショーストロム浄一

ご挨拶申し上げます。私の名前はショーストロム浄一です。オレゴン州ユージーン市出身です。主にユージーン市で育ちましたが、スウェーデン生まれで二十六歳です。二〇二四年に初めて正法寺に安居しました。その後一年ほど師寮寺で過ごしましたが、最近、正法寺に再安居いたしました。

佛眼寺は二十年前に仙台の故佛眼淨信計良老師によって設立されました。現在の住職は、計良老師の法嗣である懷淨マクレンです。アメリカには仏の教えに関心を持つている人が沢山います。仏法を学び、坐禅をすることで、彼らの人生が大変豊かになっています。佛眼寺では、お寺に住み込みで修行している人が数人いますが、常に他の方も歓迎しています。朝は坐禅・朝課誦經・掃除・応量器の朝食があります。作務は一日を通して行っています。日中誦經と晚課誦經もあります。夕方からは坐禅や坐禅教室が開かれることがよくあります。毎週日曜日には五十〜九十人が参加する大規模な集会があり、坐禅・提唱・法話などが行われます。佛眼寺の会員の多くは授戒を受けており、中には懷淨マクレンの弟子となつて在家得度や出家得度を受ける人もいます。

私が佛眼寺を初めて訪れたのは、高

校生の頃、日曜日の坐禅会に参加して、指導を受けた時でした。法話を聞いて感銘を受け、それ以来、定期的に通うようになりました。高校卒業後は家族とともにスエーデンに移住しましたが、ひとりで坐禅修行は継続していました。二年後の二〇一八年、佛眼寺に入り、二〇二〇年に在家得度を受けました。今後春には大本山總持寺に一年間安居してから佛眼寺に戻り、僧侶としての修行を終えるつもりです。

日本の文化に慣れず、日本語も下手な私を温かく迎えて修行を受け入れて下さった盛田老師や役寮様始め修行僧の皆様感謝しています。また、親切に受け入れて下さった日本の方々にも感謝の意を表したいと思います。皆さんの親切は世界に知られており、とても誇りに思うべきことです。まさにこのような氣遣いと配慮を学び、共有し、すべての生き物が平和と調和の中で共存できるように願っています。

(原英文 P C 翻訳文)



SHOBOJI
oshu, japan

特別公開中 釋迦涅槃図

お釈迦さまの涅槃図は、通常二月一日からお涅槃の十五日まで掲げられます。

この度、当山では「いわて冬季観光キャンペーン」にあわせて昨年の撮心明けとなる十二月十日より本年三月末日まで特別に公開しています。

当山の涅槃図は、縦四一四センチ、幅四八四センチ、表装を含めると高さは天井から畳までの六メートルを超え、幅も六メートル、軸は直径十一センチで長さは六・六メートルもあり、東室中の壁一面を覆います。

宝永五年（一七〇八）の『正法寺什物牒』に「涅槃像 牧野筆 言察代 伊達肥前宗房公施主」とあります。言察良道大和尚は、二十世毒峰良心大和尚遷化された延宝二年（一六七四）後、二十

一世國鯨良總大和尚が晋住される天和二年（一六八二）までの間に監寺職として住持代行をしております。

また伊達宗房公は、仙台二代藩主忠公の子（政宗の孫）で、黒川郡宮床館主でした。宗房公の子である吉村公は元禄十六年（一七〇三）に仙台五代藩主となつていきますので、涅槃図は一六〇〇年代後半の作品と思われます。

特別公開は、えさし郷土文化館との共催とし、奥州市・宮床宝蔵のある宮城県大和町教育委員会・JR東日本盛岡支社などからの後援をいただいております。

例年、冬の時は拝観者も少ない状況が続いておりますが、通常の拝観料で涅槃図を拝むことができます。山内大衆は涅槃図解説の準備も万端であり、防寒対策にも対応しております。また、予約制とはなりますが、精進料理も受け付けております。



Pari Nirvana of the Historical Buddha (Nehan-zu)



涅槃図特別公開パンフレット

第五十九回 曹洞宗青少年書道展

特別賞 五百作品展示中

（令和七年十一月四日
令和八年二月二十六日）



第五十九回曹洞宗青少年書道展の特別賞五百作品が正法寺の庫裡・廊下・法堂に展示されています。この作品は、宗務庁の呼びかけに応募した全国の青少年八三二六点の中から厳選された力作ばかりです。

これらの作品は、昨年八月二十三日より九月七日まで大本山永平寺で、十月二十三日より二十七日まで大本山總持寺で展示されました。両大本山においてもコロナの影響で六年ぶりの開催でした。正法寺においては、第五十九回にして初めての展示となります。

受け入れにあたって、大伽藍を有する正法寺といえども果たして二百五

本もの軸を拝観者の目にとまる場所に展示できるか不安でしたが、なんとかスペース内に納めることができました。しかし、風が吹き込むため風鎮代わりに急遽百円ショップで求めた小瓶を吊るしたり、障子や窓の明かりが遮られるので照明を用意するなどの工夫をしています。

拝観の方々は作品の優秀さに感心されています。展示期間も残り少なくなり、書道に親しまれている方や関心のある方がいらつしやいましたら、是非今回の書道展を御紹介ください。

次回の巡回展示は、四月十日より五月二十五日迄、静岡県可睡斎で開催される予定です。

梅花観音像建立

予てより梅花流岩手師範会より請願がありました梅花観音像が、昨年十一月十九日、当山境内にある東屋脇に建立されました。

岩手梅花流師範会では、令和六年より創立五十周年記念事業の一環として「いわて梅花雪場巡り」と「梅花観音建立」を企画推進しております。「いわて梅花雪場巡り」に関しては、県内二十五ヶ寺を梅花流巡礼地と認定しました。雪場第一番の巡礼地を正法寺に

することは、一昨年六月に山主老師の承諾の上、決定したところです。

「梅花観音建立」については、昨年に末寺護持会の手承を得ました。師範会では早速、奥州市教育委員会へ埋蔵文化財包蔵地における土木工事のための発掘の届出を提出し、十一月一日、教育委員会立ち会いの下、基礎工事のために発掘を開始しました。地下五十センチ付近に江戸時代の基礎とみられる石や炭土を発見しましたので、埋め戻しました。

昨年十一月十九日、工事完了。基礎高五寸・台座三十寸・御丈五十三寸、基礎除き約二・五メートルの聖観音様となつていきます。特徴的なのは、観音様の左手には蓮ではなく、梅花があらわれていることです。

法堂の威風を背景にした観音様の前に立つと、改めて境内の広さと重厚さを感じられ、思わず合掌する姿がみえます。



総和会東北大会 岩手県大会

昨年九月三十日、当山を会場に総和会東北大会岩手県大会が開催され、来賓を含め総勢約百五十名が参集しました。

午後一時、仏相諷經と物故者供養諷經が、岩手県支部長 吉田大信老師の導師によって勤められました。

大会式典では、御本山・總和会の会務報告や教学部長の宗教報告並びに地元議員の宗教報告の後、活発な意見発表や質疑応答が予定時間を大きく過ぎてくりひろげられました。

第三部は「鑒山禪師七百回大遠忌・相承」とその先にと題して山王老師が講演されました。

山王老師は「自己は既に方法に包まれているが、自己には分別心が薫習されているが故に、自己以外の衆生を化すことによって自他円満となる。生涯参學して自己を忘すべし」と熱く語られました。



第3回 法堂姫神コンサート

昨年九月二十七日、午前と午後の二回に分けて「第三回法堂姫神コンサート」が開催されました。

主催は姫神・星吉紀氏の北天社ですが、企画段階から当山布教師が実行委員会に加わり、読經とのコラボレーションや椅子坐禅体験なども盛り込まれました。

法堂露地中央に北面した星氏に対し、大間や両序に南面した百人の観客は法堂正面から吹き込む快い風を受けて、シンセサイザーの音に浸っていました。

山王老師の「心の平穩が音楽によって表現される世界がある」というメッセージにふさわしく、前回とはひと味違ったコンサートとなりました。



法話会

令和六年度最後の法話会が、達磨忌の十月五日に、定員百名を超えて開催されました。

山王老師の法話は、達磨忌にちなみ、『從容錄』第二則「達磨廓然」から始まりました。お話を

「達磨廓然」の第一義とは聖愚を超越したものであり、真実の功德とは清らかな智慧（無分別智）であるが、日常底は分別だらけである。分別を離れようとする心もまた分別である。人生の目標は生身家老死の五計あげられるが、人生の目的は死を自分に引き寄せて生きることである。更に鑒山禪師の師檀和合をとりあげ、欣求菩提教化衆生が円満して修行成就となるが故に、自己の信は他に証明していただくものである。と頂戴いたしました。



臘八攝心

十二月朔日午前九時に維那和尚の「この座より攝心」に始まり、八日未明の放禅鐘まで、攝心が如常に行行されました。

二日から六日目までの提唱は、それぞれ盛田山主・高橋堂監・春日後堂・松森単頭が勤めています。四日目以降の夜坐中には独参も行われました。六日には土曜参禅会の有志も参加しました。また七日八日の両日は、山王老師を慕う北海道や宮城県からの御寺院数名も坐り、共に猷粥諷經を勤め、五味粥を頂戴しました。

毎年小寒の正月五日より節分まで、寒行托鉢を修行しています。この間毎日、曉天・朝課・小食罷、威儀を整え、八時半の韋駄天諷經の後、水沢市街地へ向かいます。市街地を二つに分けて隔日、およそ三時間かけて巡ります。

寒行托鉢





釋迦涅槃図とは

釋尊（お釋迦さま）が八十歳のとき、クシナガラで病に伏し、四方に二本ずつ植えられた沙羅双樹に囲まれた寝台の上で、北を枕に西を向き、右脇を下にして横たわり、入滅する様子を描いたものです。周囲には深い悲しみに暮れる菩薩・弟子・天人在家の人々が集い、象・獅子・虎・鳳凰・鶴・鶏などの動物も描かれています。また、右上には釋尊の母・摩耶夫人が天から飛来する姿が表されています。

正法寺の涅槃図は、寝台の右側が見える「宋形式」の構図をとりながら、本来なら寝台の中央に配置される双樹が、釋尊の姿を遮らないよう位置をずらして描かれています。

この涅槃図は、釋尊が入滅したとされる二月十五日に行われる「涅槃会」の際に公開されます。

我が滅後に於いて、
当に波羅提木叉を
尊重し珍敬すべし

「佛垂般涅槃略説教誡經」より

涅槃会諷經

二月一〜十四日の期間、曹洞宗の寺院では涅槃図を法堂（本堂・東側の室中という部屋に掛け、晩課・夕方の御勤めの際にお釋迦さま最後の説法とされる「遺教經（佛垂般涅槃略説教誡經）」という御經を誦誦します。

そして、命日とされる二月十五日にお釋迦さまの威徳を偲ぶ「涅槃会」と呼ばれる法要が執り行われます。

當山の涅槃会は参詣者のどなたでも御自由に参列することができます（別途拝観料）。

詳しくは「正法寺 総合受処」までお問い合わせください。

二〇二六年

二月十五日（日）十時より

正法寺 法堂 涅槃図前に於いて



PARI NIRVANA OF THE HISTORICAL BUDDHA

(NEHAN-ZU)

正法寺所蔵 『釋迦涅槃図』と 宮床伊達家

この涅槃図は、宝永五年（一七〇八）に作成された『正法寺什物牒』には「涅槃像 牧野筆 言察代 伊達肥前宗房公施主」と記されており、本図はその記録に該当する作品だと思われます。

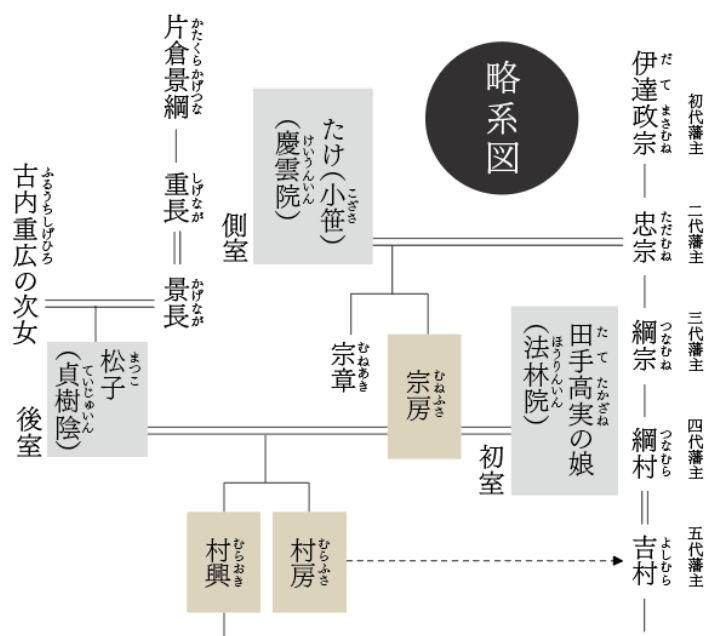
宮床館主・初代伊達宗房公（一六四六～一六八六）は、仙台藩二代藩主・忠宗公の八男で、初代藩主・政宗公の孫に当たります。母は側室・小笹（山戸土佐の娘）で、正保三年（一六四六）青葉城に生まれました。

四歳のときに田手高実の嫡女に配され養子となり、岩手県口内村（現・北上市）で一七〇〇石を賜わり、初めは田手肥前宗房と称しました。

万治二年（一六五九）、十四歳で伊達姓を与えられ、一門に列せられました。翌年、在所を宮床村に移し、小野村を合わせて三〇〇〇石となりました（二代村興の代には八〇〇〇石）。

築城・屋敷割・社寺の建立などに尽力し、夫人・松子と共に厚く神佛を信仰し、宮床の礎を築きました。宗房の長子である吉村（一六八〇～一七五二）は、元禄十六年（一七〇三）に四代藩主綱村を継ぎ、仙台藩五代藩主となっています。

こうした系譜から判断すると、この涅槃図もその時代、すなわち十七世紀後半に制作された可能性が高いと考えられます。



伊達宗房画像（覚照寺所蔵） / 宮床伊達家 初代館主



大義山 覚照寺（宮城県黒川郡大和町）

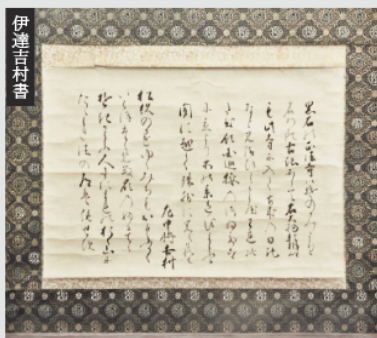
寛文6年（1666）、宗房公が母・小笹のために慶雲寺を建立しました。その後、嫡男で仙台藩5代藩主となった吉村公が覚照寺と改称しました。

関連展示

當山所蔵の仙台藩五代藩主・伊達吉村公の書は、涅槃図の関連展示として、2026年2月1～28日まで、當山庫裡「瑞鳳閣」床の間にて展示致します。

伊達吉村書

巡国の際に正法寺へ立ち寄った仙台藩主・伊達吉村公が當山の由緒を記し、その佇まいを愛でて詠んだ和歌です。吉村公は宮床伊達宗房公の嫡男として生まれ、後に伊達綱村公の養嫡嗣となつて藩主を継ぎました。藩財政を立て直すなどの政治手腕に優れ「中興の英主」と評されたほか、和歌や書画などの芸術面にもその才能を発揮したことで知られています。



黒石の正法寺へそのかみより
名ある古跡にして右大将頼朝卿
も此寺に入て古来の日記
なと見給ひしかやわれ比
たひ領國巡接のついでこ
に立より所の景色をうかふに
間に越て殊勝に覚ければ
左中将吉村
松杉のかげゆくみちもおくふかく
いははたいめる嶺のふてら
ゆきかよふ人たにまれのおく山に
たいしき法の道は絶せぬ

【共催】 えさし郷土文化館

【後援】 奥州市 / 大和町教育委員会 / 東日本旅客鉄道株式会社 盛岡支社 / (株)JAZZRIZE DESIGN

